埋文センターの調査から　速報

春日部（かすかべ）遺跡（亀岡市）

春日部遺跡は、亀岡市曽我部町南部に所在する古墳時代から中世にかけての集落遺跡です。近年の調査では、古墳時代の竪穴住居や平安時代の掘立柱建物、周囲を溝で囲まれた館跡などが見つかっています。令和４年度の第６次発掘調査の結果、古墳時代中期（５世紀）や後期（６世紀後半）の竪穴住居や焼土坑などの遺構が見つかりました。また、平安時代から中世にかけての掘立柱建物や柵などの遺構が見つかりました。

古墳時代中期の方形竪穴住居からは、西辺壁中央に竈と考えられる焼土塊、中央に炉と考えられる焼土痕が見つかり、竈と考えられる焼土周辺から大阪湾岸で作られた製塩土器が複数個体出土しました。この製塩土器は、古墳時代中期に大阪湾岸で精製された塩がこの地にまで流通していたことを示す注目すべき遺物です。

製塩土器

竪穴住居（南から）

遺物が語る京都の歴史

石棒（京田辺市薪（たきぎ）遺跡）

石棒は縄文時代に用いられた男性を象徴する祈りの道具です。男性の性器を模倣していることから、子孫繁栄や豊穣を祈るものと考えられています。前期に作られ始め、中期に大型化します。薪遺跡のものは、頭部の残欠で、頭部径 19.5 ㎝を測ります。これと同形同大の頭部をもつ完全な形のもの（頭部径 18.6 ㎝、全長 95.3 ㎝）が、綾部市の葛禮（くずれもと）本神社に現在も子安神として祀られています。

発掘調査
よもやまばなし

遺跡を測る

平板測量は、発掘調査で検出した竪穴住居や古墳の等高線などの測量に多用されていました。今では、デジタル測量が主流になりましたが、測量の基本が凝縮されています。

【発行日】令和５年 12 月
【編集・発行】
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 - 0002　京都府向日市寺戸町南垣内 40 番地の３
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

KYOTO ARCHAEOLOGY CENTER
2023
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

もっと知りたい

京都の遺跡　第 13 号

縄文時代から中世までの調理具のうつりかわりをご紹介します

福知山市石本遺跡出土の移動式竈（韓竈）と甕・甑

むかしの調理具

－煮る・炊く・蒸す－

日本の文字のはじまりは？

現在日本で主に使われている文字には、中国から伝わった「漢字」と漢字をもとに作られた「カナ文字（ひらがな、カタカナ）があります。古代に紙に書かれた文字の多くは失われてしまいましたが、発掘調査では、墨で文字が書かれた木の札（木簡）や、土器（墨書土器）などに出会うことがあります。文字が本格的に使用され始めたのは、白村江の戦い（663 年）で敗れ、唐を意識して文書主義を特徴とする律令制度などの導入をはかった 7 世紀後半の飛鳥時代からです。当時はすべて漢字で表記されていました。やがて漢字に音を当てた「万葉仮名」が使われはじめます。万葉仮名はひとつの音に多くの漢字をあてていたため、全部で 1,000 字もの漢字が使われていました。

木簡 - もっかん -

薄い木の板に墨で文字を書いたものです。受取人にあてた文書木簡のほか、地方から京に運ばれる貢進物に付けられた荷札木簡、漢字の練習に用いた習書木簡、そして九九木簡や、和歌などを書いた歌木簡などがあります。

文書木簡

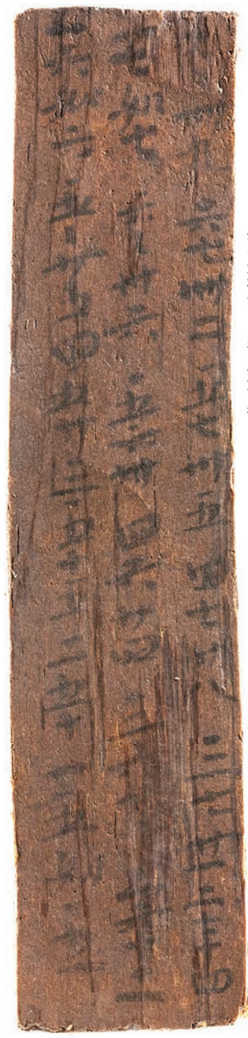
「御司召／上加□園依　上加□虫万呂　秦得万呂　加□乙人／右三人等為流人送召件人宣承知斎」と記され、「御司」から四人にあて、罪人を護送するよう出頭を命じています。（長岡京市　更ノ町遺跡）

荷札木簡

「海戸主海八目戸服部姉虫女米五斗」海（海部郷か）の海八目の家族である服部姉虫女が米五斗を貢進したと記されています。（木津川市　上狛北遺跡）　奈良文化財研究所撮影

習書木簡

「書央書書書」字の練習をしていたようです。（京丹後市　霊尾遺跡）



九九木簡

奈良時代の九九を表記した木簡です。当時の九九がその言葉のとおり、九九から始まり八九・七九…と続いていたことがわかります。役人が利用する一覧表だったのでしょうか。（京丹後市　霊尾遺跡）

歌木簡

歌一首を記した木簡です。「阿支波支乃之多波毛美□」と万葉仮名で記されており、万葉集に記載のある和歌と一致します（木津川市　国史跡 神雄寺跡）

墨書土器 - ぼくしょどき -

須恵器や土師器に墨で文字が書かれたものです。１～３文字程度の短いものが多く、「厨」「園」「倉」「□□寺」などがあり、使われていた須恵器・土師器の所属場所などを示すものが多いのではないかと考えられています。

「園」（長岡京市　更ノ町遺跡）

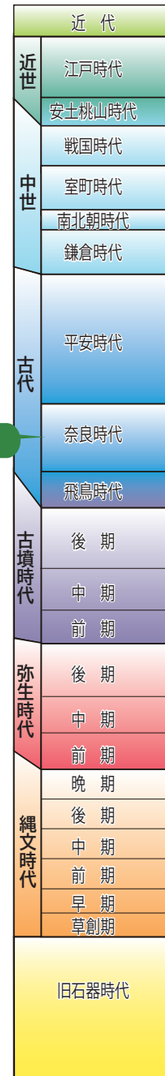
「倉」（京丹後市　霊尾遺跡）

「神雄寺」等（木津川市　国史跡 神雄寺跡）
馬場南遺跡として発掘調査を実施したところ、古代の寺院跡がみつかりました。「神雄寺」と書かれた墨書が多数出土し、文献にない「神雄寺」が存在したことがわかりました。そのほか、「黄葉」と記されたものやお経を記したものもあります。

文字瓦 - もじがわら -

刻印瓦

「真依」（井手町　井手寺塔跡）
恭仁宮式文字瓦と呼ばれるものです。急遽計画された恭仁宮の造営のために官営の瓦工房で特注品として製作されたものと考えられ、瓦工人たちはその出来高を確認するため工人名を記したようです。再利用、もしくはストックされていたのか、平城宮跡や東大寺など恭仁宮跡以外でも出土しています。

線刻瓦

「嶋曶」（井手町　井手寺塔跡）
瓦に文字や絵を線刻で描いたものがあります。写真の文字は、「嶋麿」の麿が万呂で表現されているようです。